

敗戦・占領・戦後危機下の高島亀太郎（中）

川 東 蟬 弘

目 次

はじめに

第1章 1945年

第1節 家業

第2節 政治

第2章 1946年

第1節 家業

第2節 政治（以上，前号）

第3章 1947年

第1節 家業

第2節 政治

第4章 1948年

第1節 家業

第2節 政治（以上，本号）

第3章 1947年

1947年（昭和22）の初めは、経済危機・生活危機が進行し、「二・一ゼネスト」が準備され、労働争議最高揚期です。県下でも、宇和島でも争議が高揚します。しかし、「二・一ゼネスト」はマッカーサーの中止命令により不発に終わります。その後、労働運動は一時停滞しますが、そのエネルギーは持続します。6月以降、再び県下の労働運動が高揚しますが、そのきっかけをつくったのが、別子の大争議で、6月6日別子の労働者6,000名が、身分制度の撤廃等を要求し、1907年（明治40）、1925年（大正14）以来の3度目の大争議（スト）に入っています（7月19日、中労委の調停により解決）。以後、伊予製紙、大王製紙

などでも争議がおきています¹⁾

宇和島でも同様です。この年南予木材労働者の組合が頻繁に賃上等を求めて争議を行い、高島亀太郎も何度か争議に直面し、対応に追われています。

本年も「戦後改革」=民主化が引き続き進みます。公職追放面では追放範囲を地方公職にまで拡大します(1月4日)。農地改革面では地主への土地買収がはじまります(3月31日)。教育改革面では教育基本法と学校教育法が公布されます(3月31日公布,即日施行)。労働改革面では労働基準法が公布されます(4月7日公布,9月1日施行)。財閥解体面では83社が持株会社に指定され、解体され、また独占の復活を阻止するために独占禁止法の公布がなされ(4月14日公布,7月20日施行),さらに過度経済力集中排除法も公布されました(12月18日)。さらに何よりも憲法,地方自治法が本年施行されます(共に5月3日)。

本年の政治も大変動です。4月には新憲法下各種選挙が行われました。4月5日に住民の直接選挙による初めての愛媛県知事選挙,宇和島市長選挙があり,20日には貴族院に代わって設けられた初めての参議院議員選挙があり,25日には衆議院議員選挙(第23回)が行われ,そして,30日には県会議員選挙,宇和島市会議員選挙と続きました。

その結果,中央政界は大変動です。「二・一ゼネスト」を準備させたエネルギーは,4月25日の総選挙で社会党を第1党に押し上げ,吉田茂自由党内閣を退陣させ,片山哲社会党内閣を誕生させます。保守の強い愛媛県でも社会党が一定躍進します(9議席中3議席)。戦後民主化高揚の現れです。ただ,県知事選では,革新側はなお弱く,保守が勝っています。

この年,亀太郎は64歳です。家業に追われています。政治・選挙にかんしては,公職追放の身ですので,関与していませんが,いくつか記事が見られます(甥の中村純一の衆議院立候補など)。

1)『愛媛地評十年史』30～37頁。『愛媛県史概説 下』77～81頁。

以下、本年の家業面と政治面について考察しましょう。

第1節 家 業

(1) 宇和島木工会社関係

亀太郎の経営する宇和島木工産業株式会社（製材及び木工家具）は、1月4日から始業しています。

1月7日に、亀太郎の木工会社も加盟している木材生産施設組合²⁾の総会があり、出席しています。この時名称を宇和島林産組合と改称しています。「午前会社に出勤し、午後一時から木材生産施設組合の臨時総会に北宇和地方事務所に出席する。改組の結果、其まま林業会の地区組合となった」。

1月初旬、南予木材労働組合（組合長是沢亀雄）が、宇和島林産組合に対し、賃上げと労働時間短縮を要求し、争議を起こしています（ゼネストも辞さない）。それに対し、1月12日、亀太郎は製材業者（資本家）側の会合を開き、協議をし、交渉に入っています。「午後一時から北宇和地方事務所に於ける市内製材業者の会に出席して、木材労働組合より要求の賃金値上げの件に就て協議を重ね、業者の意向を纏めて交渉に入った」。

1月15日、労資交渉が決裂したため、組合側は20日よりゼネストに入ることを決定しました。そこで、1月18日に愛媛県労働調停委員会の調停が入りました。「木材労組合交渉の件で林産組合へ行った。午後も此件で油野製材所で愛媛県労働調停委員長の中平常太郎君³⁾と会見した」（1月18日）。

その結果、1月19日、中平の斡旋で、労資双方が譲歩し、ゼネストが回避されています。「午前会社に出務し、又宅で中平常太郎君の来訪に接した。其結果

2) 1946年2月27日、木材業者及び製材業者からなる木材生産組合を設立、同年9月4日、木材生産施設組合に名称変更していた。

3) 中平常太郎は、明治12年西宇和郡伊方浦に生まれる。大正3年から宇和島で醤油醸造業始める。大正4年から宇和島町会議員、大正14年から昭和9年まで宇和島市会議員。昭和2年から宇和島市民共済会を設立し、救貧救助・失業保険・罹災救助にあたる。戦後の21年3月愛媛県労働委員会委員長に就任していた。クリスチャン。亀太郎の友人である。本年4月の参議院議員選挙で社会党から推されて当選する。のち、宇和島市長にも就任。

木材労働組合要求の賃金値上問題は、同君の斡旋により先方の譲歩を見たので、業者側も昨日迄の主張を聊譲歩して一致点に到達、明日より決行の筈のゼネストを中止せしめることに予の責任に於て同意した。依て林産組合専務理事の柴田君にも会いて承認せしめ、此解決を業者に通知することとした」。

1月20日、亀太郎は、製材業者を集め、経過報告し、了解を得ています。「午後に一時から地方事務所に林産組合所属の市内製材業者を会して、予等出席の上、労働組合の値上問題解決の経過と結果を報告し、一同の同意を得た。三時半終了」。

以上のように、亀太郎が争議の前面に立ち、交渉し、妥協的解決がなされたようです。

ところで、昨年末から本年1月にかけて、インフレ・生活危機から全国の官公庁の労働者が決起し、「二・一ゼネスト」にむけ、争議大高揚です。1月18日、全官公庁労組共闘委員会は、2月1日午前0時を期して無期限ストに突入することを宣言し、1月28日には吉田内閣打倒、危機突破国民大会を宮城前広場で開催し、30万人も参加しています。県下でも、宇和島でもゼネストの準備がなされています。宇和島の教員組合もストの構えです。日記に宇和島中学の教員のゼネスト関係の記事が載っています⁴⁾。1月30日「二時迄に宇和島中学校へ行って父兄会理事会に出席、復興建築促進方を協議し、時節柄校長より教職員ゼネストには字中としては授業を廃せざる方針との報告をも聴きて四時過散会、帰宅した」。1月31日「十時から明倫国民学校へ行って全国教職員労組のゼネストに対する態度決定に就き、教員と市内各学校父兄会代表者と会談の集会に出席する。宇和島中学校父兄会としては積極的に此問題に介入せざる旨を述べ、正午過散会と共に帰宅した。……夜九時のラジオ及び其時間以後十一時頃迄の臨時放送により、明日二月一日午前0時を期して決行の筈なりし全国官

4) 亀太郎は孫の重章さんが宇和島中学に在学していた関係上、宇和島中学校の父兄会の理事長をしていました。県下の「二・一ゼネスト」の動向は、『愛媛地評十年史』23～27頁、『愛媛県史概説 下』75～76頁。

吏、全教、全通、全鉄のゼネストはマッカーサー司令官の命令により中止となったことを知る」。

「二・一ゼネスト」が準備されていた1月31日、宇和島市内の製材業者は木材労働組合に対抗するべく、宇和島製材組合を結成しました。亀太郎がその会長に就任です。「午後一時過地方事務所に於ける市内製材業者の任意組合結成の会に出席した。労働団体との交渉に衝り、又業者間の親和を計る趣旨の組合で、宇和島製材組合と名付け、規約を決議した後、予、推されて其会長に就任し、柴田君が事務長となることになった」。以後、何度か争議がおきますが、会長の亀太郎が対応することになります。

さて、家業の木工会社の業務の方に戻りましょう。前年に続き進駐軍の家具の生産に携わっています。

1月15日、亀太郎は松山での進駐軍特殊家具生産協力会の発会式があり、出席しています。「午前九時から県庁の商工課へ行き、十時貴賓室で挙行の進駐軍特殊家具生産協力会の発会式に参列した。堤経済部長、得能商工課長臨席の上、式があり、次で越智奨君を座長として定款及び予算を決議し、正午閉会した」。

2月10日、進駐軍用の家具発注がありました。「午後会社へ県商工課の松崎事務官等来訪、進駐軍家具製作の勧奨あり。交渉の結果、吾会社割当数を減じ、材料の都合上、月末迄に貳拾個の三尺簞笥を納むることに決定した」。

2月24日、愛媛県家具工業統制組合（組合長越智奨）が解散され、新しく家具商工業協同組合に衣替えしています。「午前七時四分の汽車にて出発、松山へ出張する。午後二時半着松、直ちに県庁へ行き、人事課長室で開会の家具統制組合の会に出席して協議に入った。今回法規の改正に據って、従来为爱媛県家具工業統制組合を解散することに決し、尚新に之に替るべき愛媛県家具商工業協同組合の発企人会をも開いた。四時閉会」。

4月28日、松山に行き、進駐軍用家具の協議会に出席しています。「午前六時三十四分の列車で出発、松山へ出張する。十二時四十分着。直ちに県商工課の進駐軍用家具受注に関する協議会に出席。是迄の協力を止めて新たにメー

カー十二名丈けで組織の協力会が出来上がり、材入手の打合をした」。

5月9日も同様です。「午前六時三十四分の汽車で出発、松山へ行く。午後〇時四十分着。一時から県庁商工課別室で開かれる進駐軍家具関係の会合に出席する。交易営団の高橋氏との折衝もあり、未解決のことも生じて十二日再会合を約して四時過散会した」。

5月12日も同様です。「午前六時三十九分北宇和島駅発の列車にて出発、松山へ出張する。午後一時前松山駅に着き、直ちに県庁へ行って経済部長室に於ける進駐軍家具製作の協議会に出席する。九日会合の続会である。本日は県官の外、交易営団の高橋、大興産業の村瀬、家具協の越智の諸君も皆顔が揃い、熟議の結果、従来 of 営団、家具統、大興間の計算を近々解決の上、営団、業者間直接の新発注に及ぶこととして四時散会した」。

5月20日、家具商工業協同組合の宇和島地区の結成総会があり、出席しています。「午後一時商工会議所に於ける宇和島地区家具商組合(愛媛県家具協の構成)設立総会に一寸顔を出し……」。

5月20日、南予木材労働組合がまた賃上げを要求し、争議を起こしています。「二時より地方事務所に於ける宇和島製材業組合の協議会に出席する。南予木材労働組合よりの賃金値上要求に対して検討の上、予、座長として業者側の意向を纏め、林産組合専務の柴田君と共に組合側と折衝することにする」。

5月23日に、亀太郎は資本家側の代表として、労組側と会見、交渉しています。未解決です。「夜七時より木材労働組合の代表者会長是沢亀雄君外六名来宅、当方は柴田君来り、予と兩名業者代表として会見の上、労組要求に係る賃金値上に就て交渉したが、解決に至らず、十時散会した」。

5月25日に再度交渉しています。依然未解決です。「午後一時地方事務所楼上に製材業者を集めて、労組対策を協議し、予より代表者と会見の経過を報告の上、三時から更に労組代表者八名の来席を容れて双方の主張を述べしめたが、依然解決を見ず。少数代表者間で一度会見を約して五時散会した。是沢君等と明晩吾宅で会見することに打合の上、帰宅した」。

5月26日、労組側が譲歩しています。「夜七時から労組代表の是沢、稲葉、横川の三人の来訪を受け、折衝をした結果、先方も譲歩して接近を見たので、今一応業者へ計りて確答することにして、今夜の会見を了った」。

5月27日、製材業者側（資本家側）も譲歩し、解決しました。「午後二時から地方事務所で製材業組合の会を開いた。予より業者一同に対して経過を報告し、互譲方を勧説した結果、昨夜の交渉で先方意向の明瞭になった職長等一月協定の四割上げ、雑役同五割上げを以て、予に一任することに決定した。五時閉会。六時半柴田君宅へ労組代表三名を招きて、予と柴田君より本日の決定を報告し、茲に賃金問題の解決を見たのである」。

労働争議が解決し、亀太郎は再び、自己の木工会社の業務に従事しています。

5月30日、松山に行き、進駐軍各協力会の会合に出席しています。「十時県庁商工課へ行き、経済部長室での進駐軍家具協力会の会合に出席する。協議に時を遷して、午後四時散会」。

6月20日も同様です。「十一時より県商工課で開会の進駐軍家具生産協力会の会合に出席し、協機図面の展示其他打合があつて、午後二時半に了った」。

7月10日も同様です。「六時三十九分北宇和島より出発、松山へ出張した。午後〇時四十分松山着。直ちに県商工課へ行って、貴濱室に於ける進駐軍用家具の協議会に出席する。松崎事務官より上京報告があつて、更に追加発注引受に関する協議をなし、四時半散会した」。

7月26日も同様です。「午前六時三十四分本駅発の列車で出発、松山へ出張する。午後〇時四十分着松。直ちに県庁へ行って商工課で進駐軍家具追加受註の打合を請け、森松君等の各メーカーとも協議の上、二時半散会した。直ちに市駅三時発の電車で三津へ行き、木工協会を訪ふて床板材の引合せをし、二見木材の社長谷岡氏にも会った」。

7月末、また、南予木材労働組合側が、退職手当て要求を出しました。製材業者側は拒否です。7月31日「午後一時から宇和島製材業組合の協議会を地方事務所楼上に開き、予、座長として木材労働組合要求の退職手当金支給規程協

定に就き諮ったが、拒否することとなり。三時閉会した」。

8月以降も家業に従事です。8月21日「十時半県庁へ行き、十一時から門屋組楼上に於ける進駐軍家具協力会の会に出席する」。8月26日「十時過県庁の進駐軍家具協会協議会に出席する。森松君の上京報告、県係官の交替挨拶や打合があった」、9月3日「県の政金技師の来社を受け、進駐軍家具の検査があって合格した」等々。

10月、亀太郎は、市内の古島木材の労働紛争に関与しています。1日「朝、古島製材の若主人来訪、次で木材労働組合の横川君来訪。十時から其関係で朝日町富岡製材所に於ける労資交渉会に出席する。古島製材の労働問題に就き、南予木材労働組合から県労委へ調停を申請した結果、県から労政課の事務官宇都宮氏、労働委員会事務局の後藤君等来字、双方の関係者十数名を集めた会合で、予は宇和島製材業組合長として出席したのであるが、種々折衝の結果、漸く一応の解決を見、午後四時に至って覚書の交換を了った。五時宇都宮事務官等数名と古島製材所主の自宅で夕食を共にした上で帰宅した」。

10月から12月にかけて、亀太郎は木材労組側からの休電月の労働者への給与支給問題や越冬資金問題の要求に対し、対応しています。10月8日「午後一時から地方事務所に於ける製材業組合の協議会に出席し、予、座長として、休電月の労務者支給の問題、其他当面の諸件を議し、近日木材労働組合へ交渉することとし(た)」、10月11日「十時林産組合へ行って労働組合との交渉に参加し、正午帰宅」、10月15日「六時から木材労働組合の幹部八、九名と吾宅で会見することになって居たので、製材業組合側の柴田君、土居留冶君、吉岡君も来り、双方出合の上、電気休み日の給与問題、古島製材の主任職工補充の問題等に就て、労資互に意見を交換して、十時散会した」、11月8日「夜六時から製材業組合と木材労働組合との交渉会を住吉町土居留冶君方に開くに就き出席。業者側は予と柴田、土居、坂本の四人、労組側は是沢君外八、九名で、先日来懸案の二、三件に就て折衝し、電休日有給、週休日給金支給等の要求は、近く業者会に諮りて決定することとし、十時散会、帰宅した」、11月12日「午後一

時より地方事務所に製材業組合の会を開いて、労働組合との交渉の件を協議した。四時閉会」、12月2日「午後一時から地方事務所に於ける林産組合、製材業組合の協議会に出席」、12月10日「夜六時から木材労働組合の幹部六名、製材組合の委員柴田、坂井、吉岡及予の四名、吾宅で会見の上、先般要求の越冬資金を拒絶した件に就て、重ねて交渉に接し、談じたが、解決に至らなかった。九時散会」、12月15日「午前十時から林産組合で製材業組合の協議会を開いて、労組の越冬資金問題を再議したが、依然拒否に決した。午後一時融通座に於ける総同盟の労働組合指導講演を傍聴」、12月21日「十一時から土居留冶君方に製材業組合の幹部と会合の上、労組に対する歳末祝儀の支出方に関し協議した」、12月27日「年末賞与支給額の査定をした」等々。

以上、10月以降、亀太郎は製材組合の会長として、木材労組側からの争議に対応しており、結果は不明ですが、労資双方の妥協により、解決されたものと思われる。

（2）宇和島造船関係

亀太郎は株式会社宇和島造船所の株主で、また顧問をしていましたが、6月4日、株を平田、三谷ら重役に売却することを決めています。「午前宇和島造船へ行って三谷君や平田君に会ふ。予の同社持株は今回重役へ譲ることにしたが、平田君よりは同君の吾会社持株に就いて話があり、帰途。三原君へ寄って此事を話した」。

（3）貸家関係

亀太郎は宇和島でトップの家主で、90軒程の借家を持っています。インフレが更新していますので、9月から家賃を引き上げています。1～8月の1ヵ月2,000円の家賃収入が、9月から4,500円ですから⁵⁾2.25倍への大幅な値上げです。

5) 『高島亀太郎文庫資料』（3-108）より。

(4) 山林経営関係

亀太郎は宇和島で有数の山林地主で、本年初めには230余町歩ほど所有しています。本年は財産税納付の関係と思われますが、売却が目につきます。

1月11日、北宇和郡来村祝森の所有山林を油野製材所に売却することを決めています。「西山君の世話で来村祝之森の山林を売却することに略決定した」(1月11日)、「夜、油野製材の二宮君及び世話人笹松君の兩人を西山君が伴ひ来て、昨日商談決定の祝之森山林売渡に就て契約書を作成調印し、先方から手附金を受領した」(1月12日)。

2月4日には、来村祝森の森信氏所有の山林を見にいき、翌5日買約しています。「午前八時から予と会社の井上君は自動車にて、西山、国政両君は先発徒歩にて共に来村祝森へ行き、同地笠松倉一君の買約して居る森信氏の山林を踏調査する。三千石程度の檜杉材の立木で、午後二時迄に見了って帰宅した」(2月4日)、「午前国政、西山両君の懇通で、昨日視た森信の山林立木を伐採の目的で買取る方針を定め、十時頃来訪の笠松君と折衝して買約の上、手付金を渡した」(2月5日)。

3月12日には、泉村・愛治村にある所有山林(3町歩)を売却しています。「午前山崎量美君来訪。泉、愛治両村に跨る所有山林参町余を同君へ売却することとする」。

3月20日には、清満村にある所有山林と別の山林の交換を決めています。「清満村甚田の持山を同字の他の山林と交換の談に酒井君来訪、決定した」。

9月6日には清満村野井坂の山林を売却しています。「清満の酒井善治君来り、野井坂の山林を売約する」。

12月20日には、三島村延川の山林の一部を売却しています。「正午より岩本君三島より来て、西山君と共に来訪。延川山林の内飛地や端した地等一部六町歩余を売却のことに決した」。

12月27日には、高知県の橋上村の山林の売却をしています。「土佐橋上村山林売却の方針を決定した」(12月27日)、「午前酒井善治君、西山君と共に来り、

橋上村の山林を○木材へ売渡の契約をした」（同月 28 日）。

（5）納税関係（財産税等）

高島家にとっては財産税を取られる年です。元旦の日記に、亀太郎は「財産税を取られる年で、三月が経済危機だとも云われ、余り目出度い気もせぬ正月」と述べており、納税関係の記事が多く出ています。

1 月 21 日、税務署主催の財産税法の説明を受けています。「午後一時より税務署主催の財産税法説明の会に商工会議所へ行って、三時帰宅」。

2 月 9 日以降、財産税申告資料の作成に当たり、15 日に税務署に申告しています⁶⁾。「家にあつて、夜遅く迄財産税申告資料の調査に當った。重に各村から回答に接した山林関係の調べである」（2 月 9 日）、「午後商工会議所、機帆船組合、合同銀行、参原産業へ夫々財産税申告資料のことで行き、帰後申告書の内訳書作成に當った。市に所有の宅地三千二百余坪と家屋建坪千七百余坪の各筆倍数計算だけが夜の十一時までに漸く了った」（2 月 12 日）、「午前五時から起きて申告の調べをし、七時に大浦へ行って鳥羽三郎君に会ひ、又税務署の水口君と話をして調べ物を依頼する。……午後市役所などへ行き、帰後申告書の作成に當る……今夜も十一時迄申告内訳書を書いたが、郡部十一ヶ町村に亘る畑山林二百数十町の倍数計算と有価証券、保険契約の分が出来上った」（2 月 13 日）。

6) 『高島文庫資料』に財産税申告書の控えがあります。亀太郎とセイ、重章 3 人の資産額は 88 万 8,779 円です。亀太郎が 84 万 5,355 円で、内訳は宅地 7 万 4,043 円、家屋 30 万 3,407 円、田畑山林 12 万 3,868 円、立木 4 万 8,424 円、船舶 4 万 1,956 円、預貯金 14 万 2,991 円、公債株式 7 万 4,143 円、保険 1 万 1,463 円、家庭用動産 2 万 5,000 円です。セイが 3 万 9,991 円で、内訳は山林 2 万 3,760 円、立木 2,246 円、預貯金 1 万 3,985 円です。重章は 3,433 円（預貯金）です。そして、この時点での宇和島市外郡部の田畑山林の所有町村・面積は、次の通りです。清満村（田 2 反 9 畝 22 歩、畑 1 反 2 畝 25 歩、雑地 23 町 2 反 1 畝）、吉野生村（亀太郎分、畑 2 町 4 反 1 畝 2 歩、山林 22 町 5 反 3 畝 25 歩、セイ分、畑 4 町 1 反 5 畝 25 歩、山林 27 町 2 反 3 畝 15 歩）、松丸村（田 2 反 3 畝 3 歩、畑 6 畝 28 歩、宅地 253 坪）、二名村（亀太郎分、畑 2 畝 17 歩、山林 4 反 3 畝 27 歩、セイ分、山林 29 町 5 反 6 畝 21 歩）、愛治村（畑 1 反 4 歩、山林 1 町 8 反 9 畝 4 歩）、三島村（畑 2 反 3 畝 16 歩、山林 60 町 7 反 2 畝 11 歩）、日吉村（山林 16 町 1 反 3 畝 29 歩）、泉村（畑 24 歩、山林 1 町 4 反 7 畝 26 歩）、来村（山林 7 町 7 反 3 畝 2 歩）、津大村（山林 8 町 3 反 5 畝）、橋上村（山林 33 町 1 畝 21 歩）。合計は田 5 反 2 畝 25 歩、畑 7 町 1 反 6 畝 21 歩、山林 232 町 3 反 2 畝 1 歩です。

「午前会社へ出て後、宅で財産税関係の調べをし、十一時に税務署へ行って水口署員に会ったが、資料は得られなかった。又直税課長の和田氏に手続上のことを聴き、新署長にも挨拶して、午後一時頃帰宅。ブツ通しに税申告内訳書作成の事務に当り、夜の十一時まで掛けて、立木の調べがヤット片付いた」(2月14日)、「朝早く、大榎通に山越君を訪ふて、税申告上参考となるべき点を聞き、市役所の財務課へ寄って、二十一年の国税額を調べなどして十時に帰宅。愈々財産税課税価格等申告書及び物納申請などの附属書類を調べて午後一時半漸く完了。二時税務署へ持参して直税課長へ提出した。過般来縣案の財産税申告も、事務としては一先づ済ませたが、是からの審査が如何なるか、却々の関心事で当方は八十八万八千七百七十九円と申告して居るも、後日税務署の調査は此以上になるかも知れぬ」(2月15日)等々。

3月4日に税務署から納税額が来ました。43万5,115円で、宇和島税務署管内で8位の高額納税者でした。「先日税務署へ申告した財産税申告額に基き計算した納税令書が到達した。税額四十三万円余である」(3月4日)、「南海タイムスに地方の財産税額納付者順が発表されたが、宇和島税務署管内では予が八番目である」(3月8日)。

亀太郎は、43万円余りのうち、9,632円を物納し、あと42万5,483円を金納としています⁷⁾。そして、3月15日、4月2日、4月30日にそれぞれ分割納税しています。

以上、本年はインフレあり、労働争議あり、財産税納付あり、家業は多事多難の年でした。亀太郎は一年間を振り返り、1947年を回顧して、次のように述べています。

「此の一年を通じて経済界のインフレは加速度に増進し、日銀紙幣発行高歳末遂に二千億円を超過したが、随て物価や給料賃金は現に年初の二倍乃至参倍に達して居り、今後も益此の趨勢に拍車を加ふる見込である。昨年に比し治安も

7)『高島文庫資料』より。

余りよくはならず、一般に生活不安は依前続いて居る。其間吾会社の事業も四、五月以来の金融難と労銀高の為め多大の困難を嘗めたが、幸に大過なく経営し得たのである。業種は製材少々の外、主として事務用、家庭用家具、進駐軍用特殊家具の製作であった。食糧事情は前年の最悪時期よりは稍緩和し、値さへ出せば手に入る様になって来た。衣料品は次第に欠乏の一路を辿って居る。家庭は富子が松山転校に就て倭文の手許へ復し、忍が家事手伝をやめて嫁入りした等の異動はあったが、家族としては宇和島、松山を通じての増減はない。即、宅には今予等夫婦と中学三年生の重章と女中のハルが居り、松山の方は重雄夫妻と女学校二年の富子と英夫、春雄、重恭の三男児とである。妻は胆石病が発して、兎角病弱だが、予は至極健康で仕事の外には好きな碁を打ったりして一年を無事に過した。誠に天恩を感謝するの外はない」。

第2節 政 治

1947年（昭和22）の初めは、全国的には経済危機・生活危機を背景に労働運動が盛り上がり、吉田内閣打倒の運動に発展していっていました。県下でも同様です⁸⁾。

革新側の攻勢に対抗し、1947年1月15日、松山市庁ホールにおいて、県下の進歩党・自由党の両保守党の政治家が集まり、愛媛民主党の結成式が行われました。この愛媛民主党は既に前年11月に南予で産声を上げていましたが（八幡浜で、佐々木長治、高橋英吉ら）、社会・共産の革新陣営が活発化するなかで、それに対抗するために全県的な地方政党として結成されたのでした。この大会で愛媛民主党の幹事長に県議の越智直三郎（越智郡、旧政友会）が就任し、総務として、桂作蔵（進歩）、馬越晃（進歩）、関谷勝利（進歩）、稲本早苗（進歩）、高橋英吉（自由）、薬師神岩太郎（自由）の各代議士と池田昇平（越智郡、旧民

8) 神田文人『昭和の歴史8 占領と民主主義』215～225頁、『愛媛県史概説下』75～77頁、『愛媛県の百年』271～273頁。

政)、宇和川浜蔵(松山市、旧民政)、佐々木饒(宇和島市、旧民政)の県議、久松鶴一(自由党愛媛県支部長)らが選ばれています⁹⁾。4月に行われる各種選挙の保守側の体制が作られました。この創立大会に公職追放中の身であるにもかかわらず、亀太郎は一寸だけ参加しています。日記に「午後一時から市役所ホールに於ける愛媛民主党の発会式に出席。進歩、自由両派を県内だけで結合した保守陣営の強化で、宣言、決議などあてて演説に移った頃、予は退出して、千船町の愛媛地区機帆船海運組合へ行(く)」とあります(1月15日)。

愛媛民主党の創立に呼応し、宇和島支部が、3月5日創立されました。亀太郎はここにも一寸顔を出しています。「午後一時二宮君来訪。二時蔦屋に於ける愛媛民主党宇和島支部の創立協議会に一寸顔を出した後、吉条猪十雄君方の結婚式に親戚として列席する……」。

さて、前にも述べましたように、この年は各種選挙の年です(県知事選挙・市長選挙、参議院選挙、衆議院選挙、県会議員選挙、市町村議員選挙)。以下、各選挙毎に、亀太郎の動向について見ておきます。

(1) 愛媛県知事選挙(4月5日)

敗戦時の愛媛県知事は、土肥米之でしたが、1945年10月に退職、ついで大阪府内政部長の豊島章太郎が着任、しかし、その豊島も1年程で、46年10月に岡山県知事に転任し、代わって福岡県内政部長であった青木重臣が赴任し、最後の官選知事として県政を担当していました。

知事選にあたって、愛媛民主党は、47年2月、革新勢力と対抗するには青木がよいということで(猛牛とあだ名された辣腕家)、現職の青木を担ぎました¹⁰⁾。それに対し、3月初め、中予の保守系の一部(愛民党松山支部の大西弘ら)が、県政民主化にあたって官選知事を担ぐのはおかしいとして反発し、前松山逓信局長の加藤雄一を推し、旧松山中学、旧松山高校の同窓生や元農業会長の岡本

9) 今井琉璃男『愛媛県政二十年』24～26頁。『愛媛県議会史 第5巻』30頁。

10) 青木をまず担いだのは県議の宇和川浜蔵、佐海直隆で、それを保守政界の長老佐々木長治に持っていき、決めたという(今井琉璃男『前掲書』28頁)。

馬太郎(前代議士)、松山経済専門学校長の田中忠夫、作家の岡田禎子や後の県議となる白石春樹等も加藤を応援し、保守側は分裂しました¹¹⁾ 他方、革新側の社会党は最初元松山経済専門学校教授の住谷悦治に出馬要請したが、失敗し、新居浜市の弁護士で元朝鮮総督府検事の宮崎忠義をたて、また、共産党は赤旗愛媛支局長の清水省三をたてました。知事選は3月15日告示、4月5日投票です。

亀太郎日記には、この知事選に関する記事はほとんどなく、青木と加藤の何れを支持していたのかは不明です。ただ、2月28日に加藤雄一候補が亀太郎宅を訪れており(「宅で来訪の元松山通信局長加藤雄一氏に会ふ。参議院議員の候補に立たれる由である」—記事、参議院議員候補というのは間違い—)、加藤支持かも知れません。

4月5日が知事選の投票日で、6日が開票日です。結果は、青木が23万2,596票、加藤雄一が12万5,853票、宮崎忠義が11万2,046票、清水省三が1万9,383票で、現職の青木が加藤以下を大きく引き離して当選し、初の公選知事となりました。6日の日記は「中村の方へ廻る其途中、南海タイムス社の掲示場速報を見て、知事選挙は前知事青木氏初の公選知事に当選。加藤氏が次点となったことを知り……」と記されていますが、結局亀太郎の態度は不明です。

(2) 宇和島市長選挙(4月5日、4月15日決選投票)

敗戦時の宇和島市長は上田宗一でしたが、戦争の責任をとり、1946年(昭和21)3月20日辞職し、後任には国松福祿(市会議員、自由党、弁護士)が選出され、5月29日就任し、市政を担当していました。

初めての市長公選にあたって、亀太郎は3月13日、市長候補に二宮卓(市会議員、元政友会)を考え、出馬要請をしています。しかし、二宮は立候補を見合わせています。「九時半薬師神岩太郎君方へ行って、同君及び二宮卓君に会い、二宮君の市長選挙に出馬の決意を促したが、午後同君吾宅へ来訪。結局立候補

11) 今井琉璃男『前掲書』27～31頁。『愛媛県議会史 第5巻』30～31頁。

を見合す旨の話があった」。

この時の市長選挙には宇和島の自由党から、国松、中川千代治（中川鹿太郎の養子、予州銀行吉田支店長、明治製菓三津工場長）、井上源一（弁護士、元宇和島市長）の3人が立候補しました。乱立です。亀太郎の属する進歩党からは誰も出ず、社会党が清家栄を出し、共産党は見送り、4人の争いとなりました。

自由党候補への亀太郎の態度は不明ですが、3月30日に井上源一の事務所に立ち寄っており、井上支持かも分かりません。「井上源一君の市長候補に立った選挙事務所へ寄りなどした」。

4月5日が市長選の投票日で、6日が開票日です。結果は、国松6,256票、中川5,369票、清家栄2,940票、井上2,867票で、国松が第1位でしたが、有効投票の8分の3に達せず、上位2名の決選投票となりました。「宇和島市長の公選は刻々の得票発表の結果、前市長の国松福祿君が当選と判ったので、新聞社に来合せた赤松勲君と共に、夜、国松君宅へ祝賀に行ったが、其際開票所よりの確報が到来して、同君高点ではあるが、僅かの不足にて法定数に達せず、次点者中川千代治君との決選投票が来る十五日に行われることになった」。

国松、中川の決選にあたり、亀太郎の態度は国松支持でした。4月10日の日記に「朝、中村君と上田君来訪。十一時から、予、外出、佐々木饒君を訪問する。午后堀端田中を選挙事務所として居る国松君を訪ね、二宮卓君にも会ふた」とあります。

4月15日が決選投票日です。「午前中村其他へ行き、会社へも出勤する。又市長決選投票に八幡神社の投票所へ行きて投票をした。国松候補と中川候補と各声援盛んで、白熱戦を演じて居る国松君一寸立寄った」。

4月16日に開票され、僅か5票差で国松が当選し、亀太郎も喜んでいます。「昼前に毛山君が来訪。午後まで碁を打って後、三時過に国松選挙事務所を訪ねた。市長決選開票の結果は、中川千代治君の七八九九票に対する僅に五票の多数を以て国松福祿君辛ふじて当選と判り、一同ホッとする」。

（3）第1回参議院選挙（4月20日）

1947年（昭和22）2月24日に「参議院議員選挙法」が公布され、これにより、4月20日、第1回参議院議員選挙が行われました。定数は全国区100，地方区150で、本県地方区では、6年議員1人，3年議員1人の2議席でした。

愛民党は旧松山藩主の孫で前貴族院議員の久松定武を擁立しました。元県内政部長の山口乾治は愛民党の公認を得られず，無所属で立候補しました。社会党は中平常太郎，共産党は松本新八郎（歴史学者），他に梶原計国（救国社会党），高岡福重（自称，愛媛民主党）などが出ました¹²⁾

日記には参議院選挙にかんする記事が殆どありません。久松か山口の何れを支持しているのか不明です。ただ，4月3日に山口乾治が亀太郎宅を訪れた記事があり（「午前井上君と話し，又来客者に接する。参議院議員候補者の山口乾治君も来訪」），山口かも分かりませんが，不明です。

4月20日が投票日で，21日が開票日です。結果は，久松20万4,780票，中平10万1,155票の2人が当選し，以下，梶原4万1,116票，山口3万7,580票，松本2万4,008票，高岡1万6,152票となっています。この日の日記は「参議院議員の選挙は，開票の結果，選出は久松定武，中平常太郎の両君が当選した」（4月22日）にとどまっています。

全国的には，社会47，自由38，民主28，国民協同党9，共産党4，その他124で，社会党が第1党となっています。

（4）第23回衆議院選挙（4月25日）

1946年（昭和21）4月10日の戦後第1回目の総選挙で，自由党が第1党となり，5月22日吉田茂が政権を担当していました。この吉田内閣の下で，1947年3月31日，衆議院選挙法の改正が行われ，前回の大選挙区・連記制から，中選挙区・単記制にかわりしました。そして，この日に吉田自由党内閣は衆議院を解散し，4月25日第23回衆議院議員選挙が行われることになりました。新憲

12) 『愛媛県議会史 第5巻』31頁。

法下はじめての総選挙です。

衆議院解散の日の47年3月31日、進歩党が母体となり(犬養健が中心)、芦田均ら自由党の脱党組や国民協同党の脱党組を加えて、民主党(幣原喜重郎が最高顧問、犬養健、斎藤隆夫、芦田均、河合良成)が結成されています。したがって、総選挙は、自由党、民主党、社会党、国民協同党、共産党とのあいだで、闘われることになりました。解散当時の議席数は、民主党が145で比較第1党となり、ついで、自由党140、社会党98、国民協同党63、共産党6等となっています¹³⁾

愛媛県の選挙区は3区に分かれ、それぞれ定員3人の中選挙区制です。1区(中予)では民主党が3人(現職の関谷勝利、米田吉盛と新人の川端佳夫)、自由党が2人(新人の岡井藤志郎、阿部孫次)、社会党が1人(現職の安平鹿一)、共産党が1人(門屋功)立てました。2区(東予)では、民主党が3人(現職の馬越晃、新人の村瀬宣親、石川芳男)、自由党が1人(新人の小西英雄)、社会党が2人(現職の林田哲雄と新人の赤松明勅)、共産党が1人(飯塚芳夫)立てました。亀太郎の属する3区(南予)では、民主党が2人(現職の布利秋と新人の中村純一)、自由党が3人(現職の高橋英吉、薬師神岩太郎と新人の明礼輝三郎)、社会党が1人(井谷正吉)、共産党が1人(若松齡)を立てました。3区では前回トップ当選した桂作蔵(進歩党→民主党)は公職追放のため立候補していません。

亀太郎の甥の中村純一が一前回の総選挙でも立候補の意欲を示したのですが、その時は諦めていました。今回また強い意欲を示し、3月7日亀太郎を訪問しています。しかし、亀太郎は立候補を勧めてはいません。「十時東京より帰郷の中村純一君来訪。同君衆議院議員選挙立候補に就て相談があり、意見を述べた。午後柴田君も来たが、積極的に勧めは出来ぬ情勢たることを説明して、中村君は三時頃帰った」。その後も協議を重ね、亀太郎は率直に難しい意見を述

13)『議会制度百年史 院内会派編衆議院』543～544頁。

べています。3月11日「正午追手門前松月旅館へ行って、帰郷中の桂作蔵君に会ひ、今松次郎、国松福祿、中村純一の面々も会して、昼食を共にした。午後三時中村方へ行き、同君の一旦東京へ帰るを送って帰宅した」。3月12日「夕、中村にてハルと康男に会い、純一立候補に就いて困難性の觀察を復蔵なく告げて考慮を促す」等々。

しかし、中村純一の立候補の意思はかたく、3月23日にあくまでも立候補する旨の電報が来ています。「東京の中村純一君から立候補の意志は翻し難き旨の電報が届いた」。

そして、4月2日、純一が帰郷し、立候補を表明しました。亀太郎も中村必勝の見込みはないが、立候補を容認しています。しかし、亀太郎は追放中の身ゆえ、選挙活動はしていません。「夜八時、中村純一君東京より帰省し、駅より其儘吾宅へ来て、衆議院議員選挙に立候補の相談があり、後、予も中村方へ行って、追手局長の近森君や上田亮三君とも会見の上、意見を述べた。中村君の決意固き故、必勝の見込は立て難きも善処することとなり、予は勿論追放者たるにより選挙運動に参画し得ざるを以て、主として上田、近森両君が衝に当り、上田君事務長たることに決した。選挙事務所は広十路中村宅を其儘用ふる筈である。十時半帰宅した」、4月11日「午前毛山君来訪。上田君も来る。毛山君は午後迄居って碁を打った。追放者の気安さと云ふ所である。中村君は東京の民主党（前の進歩党）と愛媛民主党の双方から公認候補となった」、4月14日「午后二時から中村君の政見発表演説会が融通座で開かれるので傍聴に出掛ける。柴田君に出会ったので、共に赤松貞君を妙典寺前の寓居に訪ひ又国松君の選挙事務所へ寄りなどして、夕方帰宅」、4月21日「午前国政、中村へ行く。午後一時から融通座で愛媛新聞社主催の衆議院議員候補者の立会演説会があるので傍聴に行った。井谷君一番良く、薬師神君も相当に良く、中村君のは少し不出来の様に思えた」等々。

4月25日が投票日です。「衆議院議員選挙の当日だから、各投票所附近は多数の運動員が拡声機やメガホンで候補者の名を呼び立てなかなか活気を呈して

居る。午前中に家族一同投票所へ行って中村君を投票した。宅に二宮君、武田君来訪。午後は柴田君も来た。此人々の話によるも宇和島市は中村君優勢に見えるが、郡部殊に喜多郡等遠方だけ、人に知られて居らぬ点で不利が多く形勢余り振わぬ様である」。

4月26日が開票日です。結果は、1区は岡井(自由)、米田(民主)、安平(社会)が当選し、現職の関谷(民主)が落選し、2区は赤松(社会)、村瀬(民主)、馬越(民主)が当選し、現職の林田(社会)が落選しました。また3区では、井谷(社会)、高橋(自由)、明礼(自由)が当選し、現職の布(民主)、薬師神(自由)が落選しました。亀太郎の推した中村純一(民主)も落選しました。党派別では民主3、自由3、社会3でした。26日の日記に「衆議院議員選挙開票の結果は、正午頃からラヂオの報道で各地当落が順次判明したが、当選挙区の結果は中村君の成績昨日の予想より概して悪く、夕方に至り、落選確定的となった。愛媛県当選者は第一区岡井藤志郎、米田吉盛、安平鹿一、第二区赤松明勅、村瀬宣親、馬越晃の諸君で、第三区は高橋英吉、井谷正吉、明礼輝三郎の三名当選。次点は布で、薬師神、中村其他の候補者落選となった。薬師神君の落選は意外で明礼君が新編入の喜多郡で進出著しかった。中村君初陣の不成功は誠に気の毒であるが、宇和島方面に候補者の数が多かった為もあり、大勢致方なき次第である。六時頃から中村事務所へ行って慰めたが、本人は割合元気であった。九時帰宅」と記されています。

全国的には、社会143、自由131、民主党126、国民協同党31、共産党4等で、社会党が大躍進し、亀太郎の支持した民主党は第3党に転落し、敗北でした。4月27日の日記に「全国的には社会党が第一党となり、自由党、民主党之に次ぎ、共産党は極めて少数に過ぎなかった」と記しています。

(5) 県会議員選挙(4月30日)

敗戦後の県会は、1939年(昭和14)9月25日に行われた県会議員選挙で当選した議員が、43年に任期延長され、ずっと議員を継続していました。戦後、戦争に協力した議員は辞職すべきだとの世論があり、また、1946年11月8日の

第2次公職追放令（地方の公職者も追放対象者とされる）で、町村長を兼ねていた22名の県議の追放が確実となりました。そこで、46年12月、22名の議員は辞職届けを出し、辞職し、その結果、県会に残留した議員は僅か11名となり、以後、県会を開くことが不能となっていました¹⁴⁾

さて、戦後初の県会議員選挙が4月30日行われることになりました。定数は51名です。135名が立候補しました。

宇和島市の定員は2名で、愛民党から現職の佐々木饒（県議、製氷会社社長）、新人の山本友一（市会議員、海運業）、向井三治（市会議員、海運業）の3人、革新側から中田庄太郎（南予民主団体協議会、菓子製造業）が、他に久留島豊（無所属、海外引揚者厚生会支部理事、元市議）の計5人が立っています¹⁵⁾ 日記に候補者が亀太郎を訪ねています。3月19日「夕方毛利兵一郎君の来訪に接した。県議に立候補の意志ありと聴き、更に碁を対局して吾宅に一泊せしめた」。毛利は宇和島市からではなく、北宇和郡選挙区から、国民協同党で出ています。亀太郎を訪ねているのは向井三治です。3月20日「朝、県議候補者の向井三治君来訪。九時より会社へ行き又郵便局、四国銀行、税務署へ更に、松山から帰って居る赤松勲君方へ行って午後三時以後在宅する」。

4月30日が投票日で、5月1日が開票日です。宇和島市選挙区の結果は、山本7,978票、向井5,717票、佐々木5,432票で、現職の佐々木が落選しました。「開票得点数の発表で新聞社前は人の山をなして居る。夕方結果判明。県会議員は北宇和郡は中谷、水谷、清家、今松の四名当選。宇和島市は山本友一、向井三治の両君当選して、佐々木饒君が落選者となった」（5月1日）。5月2日、向井三治がお礼に来ています。「午前中向井三治君当選御礼に来訪」。

県全体の結果は、愛民党37、社会党6、無所属6、自由党1、諸派1で、愛民党の圧勝であり、また当選者は全て新人議員でした。この時、松山市からは

14) 『愛媛県議会史 第5巻』92頁。

15) 『愛媛新聞』昭和22年4月29日。

立川明、大西弘、伊予郡から白石春樹、上浮穴郡から井部栄治らが初当選しています¹⁶⁾

(6) 宇和島市会議員選挙

敗戦後の宇和島市会は、やはり1940年(昭和15)5月5日の選挙で選出された議員が続けていました。市会議員選挙は県議選と同じ4月30日です。

日記には、市議選の記事がありません。4月29日「明日の県議、市議選挙で市中は到る所街頭演説があり、賑やかであった」。

4月30日が投票日で、5月1日が開票日です。5月1日「市会議員は三十名の内旧議員の当選者は五名のみで、余の二十五名は皆新顔である。杉内清君は当選し、松浦輝義君は落選した」。5月2日以降、当選祝にいたり、当選者が亀太郎を訪問したりしています。「朝、杉内、杣木両君方へ当選祝に行く」(5月2日)。「県会、市会の当選者へ祝詞を贈る。午前中に今回市議当選の土居伝吉君来訪」(5月5日)、「市議会当選の土居侃、松田満義の諸君来訪」(5月6日)等。

(7) 総選挙後の政界

1947年4月25日の総選挙で社会党(片山哲委員長)は比較第1党となりましたが、自由党(吉田茂総裁)、民主党(5月芦田均が総裁)との差は小さく三党鼎立です。社会党中心の連立政権しか道がありませんでした。社会党・自由党・民主党・国民協同党との間で連立工作が続けられましたが、結局纏まらず(自由党が社会党左派排除を要求)、自由党が野党に下り、5月23日社会党の片山哲が首相に選出され、24日片山内閣が発足しています(全閣僚兼務という異常事態で発足)。日記に「国会は社会党の片山哲氏を総理大臣に指定し、本日親任式行われる筈とのニュースを聞いた」(5月24日)とあります。

以後、片山は自由党抜きに組閣にかかり、6月1日に社会・民主・国民協同党の3党による連立政権が発足しました。社会党からは片山首相以外に、西尾

16) 『愛媛県議会史 第5巻』33～35頁。

末広官房長官，森戸辰雄文相，平野力三農相ら7名が，民主党からは芦田均外相，矢野庄太郎蔵相ら7名が，国民協同党からは三木武夫通相ら2名が入閣しています。亀太郎はこの内閣入閣した矢野庄太郎（香川県選出）に祝辞の手紙を出しています。律儀です。「今回の片山内閣で大蔵大臣に就任した矢野庄太郎君に祝詞と激励の手紙を出す」（6月1日）。

この内閣は，国民に経済危機を訴え，労働者に犠牲を強い，他方「傾斜生産方式」を押し進め，鉱工業の生産拡大をめざしています。他方，新憲法にもとづく，民主化も実行しています（姦通罪廃止，家制度の解体，労働省の発足，婦人少年局の設置，内務省の解体，過渡経済力集中排除法等）。また，片山内閣は唯一社会主義的政策として炭鉱の国家管理をめざす法案を提出しましたが，閣内では民主党が，国会では自由党が猛攻撃し，対立が深まりました。しかし，12月漸く成立させています。しかし，この法案に対し，民主党は幣原ら20数名が離党するなど，片山連立政権は弱体化しました。また，片山内閣は身内の社会党内部の左右の対立でごたごたしています（右派の平野力三農相を非協力を理由に罷免，その後任をめぐり，左派が反発し，党内野党を宣言）¹⁷⁾

愛媛県議会も青木県政下，保守党内部（愛民党）で対立がおきます。知事選のしこりです¹⁸⁾ 青木を推した知事グループ（旗本組）と加藤雄一を推した反知事グループ（反旗本組）に分かれ，ことごとく対立していきます。前者の旗本組には井部栄治，梶原勘一，越智茂，井原岸高，川口満義，清家盛義，佐々木新一，宮嶋重嘉，野間房義，森永富茂，西田唯次，小西健市，豊島辰三郎，北松好栄，二宮又次らが属し，他方，後者の反旗本組には大西弘，白石春樹，向井三治，原田改三，菅広綱等が属していました。

17) 片山内閣は，社会党政権であっても社会主義政権ではなかった（高橋彦博「社会党 首班内閣の成立と挫折」『岩波講座日本歴史 22 現代1』）。

18) このあたりは，詳しくは，今井『前掲書』参照。青木知事は，加藤雄一を推した県議には県庁の廊下ですれ違っても会釈もしなかったという。22年の8月13日に旗本派の梶原勘一が暴漢に教われ重傷を負ったが，それをけしかけたのが，反旗本派の大西弘であった（今井『前掲書』38～40頁）。

最後に、亀太郎の公職追放関係の記事を載せておきます。11月20日「以前新聞紙上等で予が公職追放のことと判り居たるが、先般東京の総理庁より昭和十七年衆議院議員選挙に推薦を受けたる件、愛媛県より翼賛会宇和島市支部長及宇和島市協力会議長たりし件の理由を以て該当者として、夫々仮指定の通知に接したので、本日其受領の報告書に異議なき旨、記入して発送した。仮指定後三十一日目より該当者としての指定を受けたるものと見做される筈である」。

第4章 1948年

1948年(昭和23)は、東西冷戦の激化を背景に、対日占領政策の転換＝「逆コース」が本格的に開始される時期です¹⁹⁾

1月6日には米陸軍長官ロイアルは、サンフランシスコで講演し、財閥解体は日本の復興を遅らせることになる」と批判し、今後日本が共産主義の防壁に役立つように建設していくと述べ、対日占領政策の転換を公式に表明しました。

3月に陸軍次官ドレーパーが来日し、日本の経済復興のために、賠償緩和、集中排除法の緩和を打ち出しました。これにより、賠償額は緩和し(47年2月第1次ストライク報告⇒48年2月に第2次ストライク報告⇒4月にジョンストン報告)、また過渡経済力集中排除法もその適用が制限されていきます(48年5月キャンベルを委員長とする集中排除審査委員会が来日、8月報告、当初の325社の指定から最終的にはわずか18社となり、実際に企業分割されたのは11社となる)。

そして、対日占領政策の転換の集大成・総括的文書が、1948年10月のアメリカの国家安全保障会議決定の「アメリカの対日政策の勧告」です。同文書は、

19) 占領政策の転換にかんしては、佐々木隆爾「冷戦の激化と占領政策の転換」、柴垣和夫「財閥解体と経済復興」『岩波講座日本歴史 22 現代1』岩波書店、1977年、神田文人『昭和の歴史 8 占領と民主主義』小学館、1983年、三和良一「戦後民主化と経済再建」中村隆英編『日本経済史 7』岩波書店、1989年、歴史学研究会『日本同時代史 2 占領政策の転換と講和』青木書店、1990年、袖井林三郎・竹前栄治『戦後日本の原点 上、下』悠思社、1992年、袖井林三郎・中村政則・豊下楯彦『占領政策の国際比較』三省堂、1994年、等々参照。

対日講和、日本の再軍備・警察力の強化、公職追放の緩和、経済復興・経済安定、賠償緩和等を打ち出しており、これまでの非軍事化・民主化政策を、再軍備・経済復興政策へと根本的に転換させるものでした。このうち、再軍備・警察力の強化等は、後の1950年の朝鮮戦争勃発に持ち越されましたが、経済復興・経済安定にかんしては、48年12月、時の吉田内閣に対し、経済安定九原則（均衡予算、徴税強化、融資の制限、賃金安定、価格統制強化、貿易・外国為替管理の日本政府移管、輸出拡大のための割当配給制度の改善、生産増強、食糧供出の効率化）の指令として出されています。

1948年の経済は、引き続きインフレが吹き荒れました。それを背景に3月、全官公労働者を中心に「3月闘争」が闘われます。すなわち、片山内閣総辞職（48年2月10日）のあと誕生した芦田民主党内閣は、3月11日に公務員の新給与ベース2,920円を閣議決定しましたが、それは労働者の生活実態に比べ、あまりにも低いものでした。そこで、争議が高揚し、特に全逋は地域スト、波状ストの戦術をとり、3月29日には東日本、30日には西日本、31日には全国一斉ストを行うことを指令しました。しかし、GHQは3月29日またまた介入し、ストは中止させられます。4月に入り、東宝争議が勃発し、激しく闘われましたが（～10月）、これも労働者側が敗北しています。6月には、全官公労は新給与5,200円を要求し、再び芦田内閣と対立します。それに対し、7月22日、マッカーサーは芦田内閣に公務員の争議権剥奪を指令し、それに基づき芦田内閣は、31日「政令201号」を出し、公務員から争議権を剥奪しました。労働政策も転換です。

1948年の政界面を見ると、この年の初めは片山社会党内閣が担当していましたが、2月、社会党内部の左右の対立から片山内閣は自滅・総辞職し、芦田民主党内閣へ代わりました。しかし、その芦田内閣も10月、昭電疑獄事件で自滅・総辞職し、保守本流の吉田民主自由党内閣に代わります。そして、この吉田内閣下「逆コース」が本格的に押し進められていきます。

以下、本年の高島亀太郎の家業および政治面について見ることにします。亀

太郎 65 歳の年です。家業面では本年もなお労働争議に直面しています。政治面では、亀太郎はなお公職追放中であり、また家業に忙殺されているためか、あまり記述がありません。

第1節 家 業

(1) 宇和島木工会社関係

1月4日から木工会社（製材及び木工家具）を始めています。普通の家具の他に進駐軍の家具を製作しています。「今日から会社の作業始まる。井上福馬君日勤を罷めて非常務となったから、或程度は松井君に代わって当らしめるが、大体予が決裁に待つ分が多くなった。午前中出勤、職工と交渉して、進駐軍用家具製作下請の単価を極める。会社受註一、二月に納入の台所腰掛は三百個である」。

1月16日に松山に行き、進駐軍用家具生産協力会に出席しています。「午前六時三十四分の汽車にて出発、松山へ出張する。十一時着松。県庁商工課へ寄りて後、道後京極に於ける進駐軍用家具生産協力会の会合に出席し、協議、打合があつて、午後三時閉会した。直ちに三番町の林産組合連合会へ行って、三好主事に会ひ、木材割当証明書申請に就て依頼……」。翌17日に道後南町の農林省資材調整愛媛事務所に行き、木材配給を要請しています。「道後南町の農林省資材調整愛媛事務所へ行って木材配給の係に割当証明書の第四、四半期分交附方を要請したが、本日のことにならず、午後〇時二十三分の下り列車にて松山を出発し、五時宇和島に帰った」。

1月21日には宇和島地区の家具協同組合の総会があり、出席しています。「商工会議所で宇和島地区家具組合の総会に出席する。松山から県協同組合会長の越智奨君も来会、協議があつて、五時過ぎ散会した」。

1月23日、宇和島地区の家具協同組合の会合があり、橋本徳太郎に代わって亀太郎が会長になることを承諾しています。「本町橋本徳太郎君方に家具組合の幹部数名と会合する。協議の結果、橋本君組合会長辞任の後任として予を推さ

れ、大体就任を承諾することとした」。そして、2月3日の総会で亀太郎が会長に就任しました。「二時和霊神社籠堂（丸ノ内）に於ける家具組合の総会に出席する。家具の価格査定証紙貼付実施に就て、経済警察の佐治氏や価格監査員岡田君来席して其説明があり。予、地区組合長に就任の挨拶をして、定款案を決議した」。したがって、亀太郎は宇和島の製材業組合の会長（47年1月～）であり、また家具組合の会長ともなりました。

2月12日、松山に行き、愛媛県家具商工業協同組合の会合に出席しています。「午前六時三十四分の汽車で出発、上松する。十一時前松山へ着き、大手町梶原旅館に於ける愛媛県家具商工業協同組合の会合に宇和島地区組合会長として出席する。午後三時閉会の後、宮田町阿部組内の同組合事務所へ行（く）」。翌13日には道後南町の資材調整事務所へ行き、木材割当を受けています。「朝八時宿を出で、一旦県の商工課へ行き、十時に道後の資材調整事務所を訪ふて、係長の國田氏や主任の藤田氏に会い、木材割当証明書二千石分申請の通りの交附を受けた」。

2月中旬、前年に続き、また労働争議が起きています。2月17日、南予木材労働組合（横川組合長）の幹部が、亀太郎（宇和島製材業組合会長）を訪れ、賃上げを要求しました。「夜、木材労働組合の幹部八名来訪。製材業組合に対し、賃金増額の要求申入があった」。

それに対し、2月20日、亀太郎は製材業組合の会合を開き、対応を協議しています。「午後一時から地方事務所に於ける製材業組合の会合に出席。予、座長として労組要求の賃金増額の件を協議し、当方の案により先方と交渉することとなった」。

以降、労組側と交渉が始まりました。2月21日「夜、宅にて、予と柴田君が労組代表者数名と会見して、業者側の案を回答したが、満足を得難い形勢である」。23日「午前林産組合等へ行く。……夜、労組幹部三名来訪」。27日「午後一時から地方事務所楼上で木材労組の三十餘名と製材業者三十名と会見。予座長として交渉事項を互に検討し、業者会議の結果、訂正の条件を労組に回答し

た。四時閉会」等。

しかし、木材労組側の団結は強く、2月28日、賃上げの要求が容れなければゼネストを決行することを業者側に通知してきました。「夜、木材労組より先日の要求全部を容るゝにあらざれば、三月三日より総罷業に入る旨通知に接した」。

それに対し、亀太郎らは対応を協議しています。2月29日「十時より柴田君方へ行って林産組合事務員を招き、昨夜の労組ゼネスト通知を業者へ周知方の緊急処置をとった」。3月1日「十一時古島製材へ行って、製材業者の重立った向十数人と会して労組対策を議し、明日業者全部を招集することとした」。そして、3月2日に協議の結果、組合側の要求を拒否することにしました。業者側の態度も強硬です。「午後一時より地方事務所に製材業組合員全部を集めて労組のスト宣言に対する業者の態度決定を討究し、一致して休業善処することゝなった。四時閉会。夜九時半稲葉君等三名及び木労組の横川組合長、佐竹副組合長来訪して内部接衝に触れた」。

3月3日からストが始まりました。「木材労組本日より罷業する。吾会社は製材部だけ休み、木工部は労組以外なるを以て休業せず、大体平常と大差なき操業状態である。午前午后の二回林産組合へ行って県労委の事務当局、労政課の係員、地方事務所労政課の村上主任と会見した」。

3月4日以降もストが続きます。「午前スト関係の用件で業者側二、三の来訪があり、又会社に出勤した」。5日「午後一時から商工会議所に製材業者を会してスト実施の情勢を検討し、依然既定方針を堅守することゝなって四時散会した」。

3月8日になって、産別会議の坂尾氏からスト解決の斡旋の申し入れがありました。「産別の坂尾君来訪、製材ストの解決に就き斡旋の労をとり度き旨の申入れあり」。そして、翌9日斡旋案が出されました。「午後地方事務所に行って柴田君と共に坂尾、大川の両氏に会い、其斡旋者案を見た。明日業者に諮る筈」。

3月10日、亀太郎は製材業者を集め、斡旋者案の承認を求めましたが、業者

側が拒否し、その後、県の労政課の職員も間に入り、説得・協議がなされ、遂に業者側も漸く受け入れています。「午前九時より地方事務所に製材業者全員を集めて、予より斡旋者案に就き説明承認を可とする意見を述べたが、容易に纏らず。午後一時四国配電で坂尾君と会見し、同君は一面和霊神社へ集合中の労組と往復した結果、再び地方事務所に待機の業者側に予と共に会見。労政課の村上君も参加して、各力説の上、六時に至り漸く斡旋案に一任することゝして承認解決を見た。労組は明日より就業の筈である」。

3月11日に労資協定書に調印がなされています。「午前十時林産組合へ行つて坂尾、村上の両氏、横川君に会い、昨日条件決定の労資協定書に調印する」。

しかし、この亀太郎の争議解決の態度に不満だったと思いますが、製材業者側の3名の理事が辞任しました。「坂本、土居、吉岡の三君製材業組合理事辞任の届出があった」（3月11日）。そして、その後、宇和島林産組合（木材業者と製材業者で構成）内部で内紛が続きます。

4月15日に宇和島林産組合の総会があり、赤松貞会長、柴田専務理事辞任し、役員が改選されています。亀太郎は顧問に就任です。「午後一時地方事務所に於ける林産組合の臨時総会に出席する。先般来組合員中に内部事情あって、柴田君専務理事を辞任し、会長赤松貞君も既に辞任後なるを以て、役員総改選行はれ、組合長に富岡、副会長に坂本、岡田の諸氏当選し、予は顧問に推された」。

5月28日には、亀太郎が会長をしている製材業組合の方は解散にまで進みます。「予が組合長をして居る宇和島製材業組合は、前月林産組合役員改選の際、脱退者半数に余り、今残っている組合員は土建或いは木工等製材専門でない業者十四名のみであるから、組合の存続或いは解散に就いて再検討する為め、本日午後一時吾宅に於て協議会開催の通知を発して置いたが、二時頃までに来り会する者、押方君を始め、日本木製、愛媛農工等等十一名に達し、互に隔意なく話し合った上で、一応此組合を解散することに決して、三時過ぎ散会した」。

6月16日、松山に行き、愛媛県家具商工業協同組合の会合に出席しています（亀太郎は宇和島地区の組合長です）。「午前六時三十四分の列車で松山へ行く。

十時五十分着。大手町梶原旅館に於ける家具協の会合に出席。高松物価事務局山内経理課長、県の和田事務官が来て、家具製産者の差益納附金に関する説明と交渉があり、折衝の結果、県家具製産者（組合員の分）の差益総額を十四萬円として決定を見、之を各地組合へ割当てることになった。組合の決算総会もあって午後四時半閉会した」。

7月3日、宇和島地区木工家具組合の役員会を開いています。「六時から宇和島地区木工家具組合の役員会を吾宅で開き、橋本君等三名来会。差益金納入額割当の原案に就いて協議した」。

7月16日、宇和島地区木工家具組合の協議会を開催しています。「午後一時から宇和島地区木工家具組合の協議会を裏町真教寺に開催し、業者二十余名来会。予、座長として議事を進め、公価改定による差益金負担の件と其割当方を諮って一同異議なく決定した。次で地方事務所財務課の梅田主任から、県税営業税の賦課に就て説明し、組合から指数を提出することとして、五時閉会」。

7月28日、亀太郎は会社の従業員の賃金を引き上げています。「午前午後とも会社に出勤する。又々月給者、製材日給者の賃上げを決裁した」。

9月27日、宇和島地区木工家具組合の総会を開き、従来の宇和島地区組合を愛媛県家具商工業協同組合の宇和島支部に変更しています。「午後一時から裡町真教寺に家具組合の臨時総会を開いて出席する。業者三十名来会。予、座長として議事を進め、従来の地区組合を解散して愛媛県家具協の支部とすることを決定した。次で支部役員の選挙を行ひ、又税務署と交渉した。所得税額修正申告の件を説明して、来会者全部は異議なく提出することを承諾した。四時半散会」。

(2) 貸家関係

亀太郎は貸家を約90軒程所有しており、1ヵ月の家賃収入4,500円でしたが、インフレのために、本年10月にまた家賃を引き上げました。10月以降の1月の家賃収入が1万1,250円ですので、2.5倍の値上げです²⁰⁾ 10月28日の日記に「家賃の公定価格改正に伴ふ値上げについて、夜、調査や書類の作成に当

たった」とあり、その値上げの通帳を11月5日に作成し、配付しています。「午前家賃値上げで新たに通帳九十通を作り借家人に配付した」。

（3）納税関係

亀太郎は税関係には泣かされたようで、こまめに対応しています。

1月下旬、亀太郎は前年の12月30日に、自身の家具販売店であった丸善家具店²¹⁾の法人所得税納付決定通知（所得額13万円、納税額5万7,000円）に対し、不当だとして、再審査を申請しています。1月19日「商工会議所、伊豫合同銀行へ行き、午後四国銀行等へ行く。夜、金井君を招いて話をした上で、税務署へ提出すべき所得決定再審査申請書の作成に着手す。昨冬認定決定のあった丸善家具店の分である」。そして、翌20日税務署に提出しましたが、その日直ぐ税務署から調査がありました。「午前中に丸善家具店の再審査請求書を作って税務署へ提出せしめる。十時半より会社へ税務署の住谷事務官が来て、九月末の決算に就て詳細取調べがあり、帳簿その他に就て一々説明に当たった。不正当な嫌はないが、評価に対しては法人税係と会社とには見解の相違があり、午後四時過ぎまでかかってヤット一應の調査が済んだ。申請額よりは相当増加が決定を免れぬ様子である」。

その結果、3月18日、さらに大幅な追徴課税となり、藪蛇でした。「宇和島税務署から二十二年度の所得税申告納附額に対する更正決定の通知が到達し、新に税額四萬八千円の追加納入を要することになった」。

なお、亀太郎の個人所得税にかんしては、1月31日に、1947年（昭和22）分の確定申告書を提出しています。それによりますと、所得総額は5万1,309円で、内訳は利子所得（預貯金利子）224円、配当所得（宇和島木工株）2,062円、給与所得（宇和島木工）2万2,250円、不動産所得（貸家）2万3,800円、譲渡所得（船舶売却）2,973円です。そして、納税額は14,320円でした²²⁾

20) 『高島亀太郎文庫資料』(3-108) より。

21) この丸善家具店は1946年（昭和21）8月に亀太郎が堅新町に設立し、47年7月に金井定一の個人営業店としていた。

7月下旬以降、亀太郎は家具組合の宇和島地区の組合長として、納税関係の業務、税務署との交渉等をしています。7月22日「午後一時から宇和島地区木工家具組合の集会を真教寺で開き、地方事務所税務課の梅田主事も来席して、業者の業績指数の組合調査を検討の上、二、三の修正をして一同異議なく承認決定した。県税賦課の標準となす筈である。四時閉会」、7月30日「午後二十三年度所得税の予定申告する」、8月23日「午後税務署法人税の松影主任来社。三月末の決算に対する調査があつて夕刻迄掛った。尚未了である」、8月25日「夕七時から家具組合の役員数名を招いて合議の上、税務署諮問に係る業者の所得指数表を作った。十時半散会」。8月27日「税務署の法人税係松影君来社。帳簿調査があつて午後一時了った。明日個人営業家具製造業者を集めて、指数表の報告会を開くので、三時前組合長の橋本君と税務署の此の係東君を訪ふて打合をした」、9月1日「六時から家具組合の役員会を宅で開き、六名来会。指数の再調査をして明朝税務署へ提出することゝした。十時散会」、9月18日「夕六時から又家具組合の役員会を開いて、個人営業家具製造者の所得税更正額に就いて税務署と折衝方の協議をした」、9月20日「午前九時から土居、橋本等個人家具製造業者数名と共に税務署へ行って係の東君に会い、税更正額の交渉をしたが纏るに居たらず、十一時半再議を約して退出した」、9月21日「午前九時から税務署へ行って交渉の結果、個人家具製造業者の最高を所得額二十一万円として修正申告せしむることに話が纏った」等々。

1948年の家業を振り返り、亀太郎は年末、次のように記しています。

「昨年を始め壱千億円の日銀券発行高が、本年の始め貳千億円、本年末で参千六百余億円となつて打続くインフレの波高く、物価昂騰、課税過重で随分困難ではあったが、此一年も大過なく過し得た。家内一同にも変りなく、会社の事業も凡調ながら継続出来たのは、只今天寵として感謝するのみである」。

22) 『高島亀太郎文庫資料』(3-103)より。

（4）その他のこと

亀太郎は、孫の重章さんが宇和島中学生であったため（1945年4月入学）、宇和島中学校の父兄会の理事長をしており、その関係の記事がいくつか見られます。2月15日「九時高等女学校講堂に於ける宇和島中学校父兄会に出席する。上田校長代理に次で、予、父兄会常任理事長として協議事項を説明決定して、正午閉会した」、3月6日「九時過ぎから宇高女講堂に於ける宇和島中学校の卒業証書授典式に参列する。十時開式。予も父兄会理事長として祝辞を述べた。吾宅の重章も今回新制中学三年を了ったのである。十一時半終了」。

1948年4月1日より、愛媛県立高等学校設置規則により、県立宇和島中学校は愛媛県立宇和島第一高等学校になりました。それに関する記事があります。3月8日「午後一時から明倫小学校に開かれる市の教育委員会に、中学校父兄会側として出席し、新年度より昇格する高等学校名選定の協議に興った」、3月13日「午後一時から明倫校で開かれる高等学校名選定の委員会に出席した。宇中、宇高女、鶴島高女、商業、水産の諸中等学校は四月から新制高等学校に昇格確定し、宇中三年卒業の重章等は其儘新制高等学校の一年に入学出来るのである」。

宇和島中学の高校昇格に伴い、亀太郎は宇和島第一高校の父兄会の理事長にもなっていました。6月6日「午前九時から第二高等学校（旧県立高等女学校）に於ける第一高等学校父兄会に出席する。校長の話に次で、予、父兄会理事長として復興建築報告、決算予算の説明に當り、来会父兄の承認を得て十一時過ぎ散会した」、10月17日「予は十一時鶴島高等学校に於ける第一高等学校の父兄会理事会に出席し、午後一時其父兄会を講堂に開いた。栗村校長と予とで復興建築関係の話をして一同異議なく散会」等々。

第2節 政治

（1）中央政界関係

1948年（昭和23）の初めは引き続き片山哲内閣（社会・民主・国民協同党の

3党連立、1947年6月1日～)が政権を担当していましたが、前年末の炭鉱国管問題で、民主党の幣原派が離脱し、連立政権が弱化し、また社会党内部で左右の対立が激化・ゴタゴタし、不安定となっていました²³⁾

1948年1月19日、社会党大会が開かれ、そこで左右の対立が激化し、僅差で社会・自由・民主・国民協同4党政策協定を破棄を決め、左派が勝利しました。そして、2月5日の衆議院予算委員会(委員長は左派の鈴木茂三郎)で、社会党は政府追加予算案を否決し、これが命取りとなり、遂に2月10日、片山内閣は総辞職しました。社会党の左右の対立による自壊、野垂れ死であり、8ヵ月半の短命内閣でした²⁴⁾

片山内閣総辞職のあと、後継内閣をめぐって、またまた紛糾・混迷しましたが、2月21日の国会で、芦田(民主)と吉田(自由)の決選となり、衆議院では芦田、参議院では吉田となり、結局芦田が首相に選出されています。この時期、家業で忙しいのか、政界の記事は少なく、2月22日の日記に「片山首相辞職し、後継者内閣は民主党の芦田氏主班となる形勢である」(2月22日)と書かれている程度です。

3月10日、芦田民主党内閣(民主・社会・国民協同党の3党連立)が発足しました。内閣には、民主党から芦田首相外7名、社会党から西尾末広(副総理)外8名、国民協同党から2名入閣しています。

芦田内閣に対抗し、野党の日本自由党(吉田総裁)は、3月15日、民主党から脱党した幣原喜重郎らと合同し、新しく民主自由党(吉田が総裁)を結成しています。その結果、民自党の議席は152で、院内で第1党になりました。

さて、芦田内閣は、誕生したもの、片山内閣以上に弱体でした。組閣早々、公務員労働者の「3月闘争」にさらされます。また、各種のスクandalが発覚しました。まず、副総理の西尾末広(社会党右派の実力者)が、前年(47年

23) 1947年11月片山首相は右派の平野力三農相が非協力だとして罷免し、その後任をめぐって、左派社会党が野溝勝を推したが、民主党が反対し、波多野鼎が農相に就任、そこで左派社会党は党内野党を宣言していた。

24) 神田『前掲書』247～250頁。

4月)の総選挙の際、土建業者から献金50万円を受け取っていたことが発覚しました。そのため、西尾は7月6日、国務大臣を辞任しました。さらに、昭和電工事件が発覚しました。昭和電工は、復興金融公庫から30億円という多額の融資を受けており、その見返りに、官僚や政治家に賄賂を贈っていたのです。官僚では、元農林次官重政誠之、大蔵省主計局長福田赳夫らが、政治家では元自由党総務の松岡松平、民自党顧問大野伴睦、経済安定本部長官栗栖赳夫、そして、前副総理の西尾末広らが逮捕されました。その結果、ついに芦田内閣は10月7日総辞職しました。7ヵ月の短命内閣でした。日記には簡単に「芦田内閣総辞職した」(10月7日)と記されています(その後、12月7日には芦田みずからも逮捕されています)。

芦田内閣総辞職の後、政権は野党の民自党(吉田茂)に渡りました。10月11日、第3臨時国会が召集され、14日吉田茂が首相に就任し、19日第2次吉田内閣が成立しました。日記にも「吉田茂氏総理として内閣の成立を告げ、林譲治君や佐竹晴記君が大臣となった」(10月19日)と触れられています²⁵⁾

第2次吉田内閣は民主自由党の単独内閣として成立しました。少数与党の内閣でした(民主自由党151、社会党112、民主党90、国民協同党30、社会革新党20、共産党4等)。第2次吉田内閣の当面の任務は、前内閣の引き継ぎ事項である「政令201号」を法制化するための、国家公務員法の改正でした。11月9日に国家公務員法改正法律案を出し、占領軍の後押し、民主党、国民協同党の賛成により、30日成立し、公布しています。これにより、公務員労働者は争議権が剥奪され、待遇関係では人事院が設置されました。

12月1日、吉田内閣下、第4通常国会が召集されましたが、公共企業体等労働関係調整法等を通過させたあと、23日に内閣不信任案が可決され、予定通り衆議院解散となりました。そして、総選挙にむけて、一斉に動きが始まります。12月24日の日記に「議会は昨夜十一時解散となった。中村純一君は二十日帰郷

25) 林譲治は高知選出の民主自由党の議員で、厚生大臣に就任。佐竹晴記は高知県選出の社会党の議員で、大臣にはなっていません。亀太郎の誤解です。

して居るが、総選挙には民自党として立候補する」(12月24日)とあります。甥の中村純一が雪辱のため再び立候補です。

ところで、この年の11月12日に東京裁判の判決があり、12月23日に刑の執行がなされています。亀太郎も関心があり、日記にさらりとですが、触れられています。「ラヂオで東京裁判の判決言渡を聴いた。東条等死刑、其他に終身刑が多かった」(11月12日)、「東条氏等七戦犯は今午前〇時一分から刑の執行を受けたとのラヂオを聴く」(12月23日)。

(2) 愛媛県政関係

愛媛県政・宇和島市政関係の記事は、本年の日記にはほとんど触れられていません。ただ、本年7月に公布された教育委員会法にもとづき、10月5日に行われた教育委員会委員の選挙にかかわっています。県の教育委員の定員は7名で、うち6名が住民の直接選挙によって選出で(1人は県議会からの選出)、県下では14名が立候補し、宇和島からは弁護士で元宇和島市会議長の二宮卓が立候補しました。この二宮から亀太郎は相談を受けています。9月4日「夕方二宮卓君を訪ふて、同君が教育委員選挙に立候補に就き相談を受けた。県一円を選挙区として定員六名の由である」。以降、亀太郎は公職追放の身のため、選挙運動そのものはしていませんが、二宮支援です。即ち、9月21日「午後柴田君と共に二宮卓君方へ行った。同君教育委員選挙立候補の事務所開きであった」、10月2日「夜、二宮君の選挙事務所へ行(く)」、9月27日「融通座に於ける教育委員候補者二宮卓君の演説会を傍聴に行き、後、二宮選挙事務所へも寄って、十時に帰宅した」、10月4日「二宮の選挙事務所や其他へ行く」等々。

10月5日が投票日です。「午前予も妻も和霊校の投票所へ行って教育委員の選挙をし、候補者二宮卓君に一票を投じた」。

10月6日が開票日です。二宮候補は最下位ですが、当選しました。「二宮君の選挙事務所へ行ったが、本日の開票は午前午后数回の発表に二宮君の得票少く、最後まで当落を気遣はれて居たところ、漸くビリで当選と判り、一同ホッとしたのが四時半であった。即、九一三八五票の竹尾をはじめ、渡辺、和田、則内、

阿部に次で、三〇三五六票で二宮卓君が当選し、次点は二七〇五四票の阿部亀であった。祝意を表して帰った」。

なお、県下の結果は、県教員組合推薦の3名（竹尾弥次、渡辺菊太郎、和田勇）が上位当選し、組合の力を誇示し、他方愛民党推薦の菊池哲春は落選しています²⁶⁾

本年の愛媛県政の方は引き続き青木知事が担当していますが、愛民党内部で、青木知事派（「旗本組」）と反青木知事派に分かれて対立が続いています。

中央の民主自由党の結成に呼応して、愛媛でも11月20日松山市長ホールで民自党愛媛支部の結成大会が開かれ、支部長には政界に復帰したばかりの佐々木長治、副支部長には県会議長の立川明（反青木派）、幹事長には県議の大西弘（反青木派）が就任しています。亀太郎は追放の身であり、一切関与していません。この民自党愛媛支部の結成に対し、青木知事や愛民党の主流（井部栄治幹事長ら）はこの民自党に参加せず、保守内部で対立が続きます²⁷⁾

26) 『愛媛県の百年』280頁。

27) 今井琉璃男『愛媛県政二十年』43～50頁。